

豊前田川・香春の歴史（詳報）

矢 島 嗣 久

一、別府史談会主催市外史跡探訪

平成二十四年（二〇二二年）十一月十一日（日）、別府史談会の一行が定例の市外史跡探訪を実施した。目的地は福岡県田川、筑豊地区である。当日、出発時は雨天だった。

往路のバスの中で後藤重巳会長と筆者が見学地である筑豊、田川の歴史について説明をした。椎田バイパスを通過中、バスの中で馬ヶ岳城の歴史について話をしたが、雨と霧のため見る事ができなかった。

二、馬ヶ岳城跡

豊前国京都郡（現福岡県行橋市津積馬ヶ岳）、豊前京都平野を見下ろす標高二一六mの馬ヶ岳山頂に築かれた山城で、馬ヶ岳はふたこぶラクダの背中のように東西に二つの山頂があり、城の遺構はその峰を中心に曲輪が形成されている。西の峰には五〇〇mの土塁が現存しており、近隣には国の史跡となっている御所ヶ谷神籠石がある。

神籠石とは、日本古代の山城の遺跡。北九州と中国・四国に十二カ所が知られる。丘陵の八合目位に切石で列石をめぐらし、谷間には水門のある石壁がある。門址のあるものもある。

馬ヶ岳城の始まりは、天慶五年（九四二）に清和源氏の祖とされる源経基によって築かれたことによる。その後橘氏、源為朝、緒方惟義の一族、少弐氏、南北朝時代には菊池氏、その後、大内氏、陶氏、大友氏の攻防が続いた。天正六年（一五七八）には長野氏、天正十四年（一五八六）には豊臣秀吉が立ち寄り、宿泊した。九州征伐の後、豊前国を領した黒田孝高の居城となったが、翌年には中津城を築いた。見学の帰途、好天に恵まれ、馬ヶ岳を望むことができた。

三、新仲哀トンネル

新仲哀トンネルは、福岡県田川郡香春町と京都郡みやこ町に跨る仲哀峠を貫く国道二〇一号のトンネルでもある。一日の交通量が約二一〇〇台を数える交通の要所である。交通量の増加に伴い、一九六七年（昭和四二年）開通の新仲哀トンネルの南隣に全長一三六五m、幅一一m（道路幅員一四m）、片側一車線で歩道のある「新仲哀トンネル」が建設された。

将来的には片側二車線、計四車線となる計画である。

四、香春岳城跡

新仲哀トンネルを過ぎると西側の前面に左手南側から香春岳の一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳を確認することができた。地元の人々は通称、香春岳と呼ばずに、一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳と呼んでいる。すべて石灰岩からできている山である。一ノ岳は以前、標高が四九一mあったが、セメントの採掘や白色の建築材料、またはパソコン用の光沢紙の材料にも利用されていたという。

しかし、採掘していたセメント会社は、平成十六年（二〇〇四年）三月末をもって解散しているので、採掘はこれで終わりだという。現在標高がほぼ半分の二五〇mぐらいで止まっている。現在山頂は東京ドーム数個分ぐらいの広さになっているといわれている。

二の岳は標高四六八・二m、現在登山は禁止されている。

三の岳は標高五一一m、ピラミッド形で登山道も完備されていて、いずれも石灰岩からできている山である。

香春岳城は歴史が古く、天慶三年（九四〇）に藤原純友の次男、純年によってこの地に築城させたのははじまりだと

言われる。保元二年（一一五七）には、平清盛が太宰大貳となると、家臣の越中次郎兵衛に命じて新たな城の築城を行い、香春岳城と名づけた。その後は城主を替えながらも豊前の天險要害として重要地点として栄えたが、大友家所領時代に、中国地方の雄、大内盛見が香春岳城を攻撃して落城させ筑前・豊前を領土に押さえるも、少弐家・大友家と激闘を繰り広げるようになってしまう。

天文二十年（一五五二）に大内家の後継、毛利家が九州に侵攻して大友家と抗争に入り、香春岳城は約四年にわたる争奪戦の城となってしまった。永祿四年（一五六二）に大友宗麟義鎮が香春岳城奪回のため、三万の軍勢で侵攻して攻め寄せ、毛利家家臣の原田五郎義種は二百の軍勢で立てこもるも余りにも兵力の差があり過ぎたために、あえなく落城した。その後は島津氏から豊臣秀吉の手によって落城してしまっ

た。

三の岳は昔から銅の採掘でも知られている。田川郡採銅所村、現在では香春町採銅所といわれている。麓には清祀殿、神間歩等が存在する。

五、清祀殿

香春岳・三ノ岳に位置する「清祀殿跡」。

平安時代後期の天慶二年（九三九年）に、「古宮八幡宮」（田川郡・採銅所）が「宇佐神宮」に神鏡を奉納したという記録が残っているが、その神鏡（銅鏡）を実際に铸造した場所がこの「清祀殿跡」だと考えられている。付近には銅を採掘した坑道「間歩」があり、宇佐神宮にゆかりが深いこの場所は「神間歩」と呼ばれている。

拝殿風の建物（写真）の屋根は板葺で、九尺間を一間とする三間四方。土間の中央には鍛冶床があった。この建物の後ろには祠と花崗岩の石柱が三基あり、この石柱に完成した神鏡を安置していたと思われる。昭和三十一年（一九五六）に福岡県の文化財（史跡）に指定された。

清祀殿とは、中国語で「清いまつりごとをする荘厳な家屋」と言う意味。

三ノ岳の坑道から運ばれた銅が清祀殿の裏手で精錬され、ここで宇佐神宮に奉納する御神鏡が铸造された。奈良時代初期の養老四年（七二〇年）に初めて奉納され、江戸時代中期の享保八年（一七三三年）まで続いたという。

六、神間歩

神間歩、田川郡香春町採銅所は、金・銅・鉛鉱などの採掘や精錬地で、官営の機関・採銅司が置かれたところである。

奈良時代、清祀殿と「神間歩（俗に蟹間歩ともいう）」は、銅を精錬し宇佐八幡宮へ御神鏡铸造・奉納した所縁の地であると、「古宮八幡宮御鎮座伝記（長光家文書）」などに記されている。

七、仲哀天皇

仲哀天皇、第十四代天皇、二二〇年に死去。父は日本武尊、皇后は神功皇后、子は十五代応神天皇。日本武尊の父は十二代景行天皇。

八、神功皇后

神功皇后は、仲哀天皇の皇后。『日本書紀』などによれば、二〇一年から二六九年まで政事を執り行なった。夫の仲哀天皇の急死（二〇〇年）後、住吉大神の神託により、お腹に子供（のちの応神天皇）を妊娠したまま筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻めた。新羅は戦わずして降服して朝貢を誓い、高句麗・百済も朝貢を約したという（三

韓征伐)。

九、香春町採銅所

福岡県田川郡採銅所村、現田川郡香春町採銅所。北方の北九州市小倉からは国道三三二号線、金辺峠を越える。JRでは日田英彦山線を利用、呼野駅から長い金辺トンネルを通過して採銅所駅に到着。以前、呼野駅にはスイッチバック式の線路があったが、改良され無くなっている。

採銅所駅から南は香春駅に至る。東側行橋市から国道二〇一号线が走り、新仲哀トンネルを通過して香春町へ到達する。トンネルを出ると西側に標高およそ五〇〇mの香春岳連山が見える。左手、南側から一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳である。一ノ岳はセメントの採掘で高さがおおよそ半分に低くなっている。

十、長光家

福岡県田川郡香春町の香春岳三ノ岳北麓に長光という集落があり、一二〇〇年前に大分県の宇佐八幡宮の神鏡をつくったという由緒のある集落である。宇佐八幡の重要神事「放生会」にあたって豊前国の国司がこの地に来て、古宮八幡

宮の宮柱・長光氏に神鏡の鑄造を命じ、長光氏は三ノ岳産出の銅を使って一〇日間で神鏡をつくったとされる。昭和三十一年の町村合併まで「採銅所村」と呼ばれていた。いまも三ノ岳の急斜面には多くの採銅口があり、精錬遺跡と長光家は県指定史跡となっている。

十一、香春神社

祭神

辛國息長大姫大目命、忍骨命、豊比賣命

『日本三代実録』によると、豊比賣命を辛國息長大姫大目命としている。

社前には、「第一座辛國息長大姫大目命は神代に唐土の経營に渡らせ給比、崇神天皇の御代に帰座せられ、豊前国鷹羽郡鹿原郷の第一の岳に鎮まり給ひ、第二座忍骨命は、天津日大御神の御子にて、其の荒魂は第二の岳に現示せらる。第三座豊比賣命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして、第三の岳に鎮まり給ふ。」とあった。

十二、障子ヶ岳城跡

障子ヶ岳城は、福岡県の北東部京都郡みやこ町と、田川郡

香春町に挟まれた山城である。

サイト『城郭放浪記』氏も述べているように、規模そのものは大きなものではないが、現地に足を踏み入れてみると、隅々まできれいに管理され、これほど気持ちのいい山城はめったにお目にかかれない。まるで、庭園を鑑賞するような造形美さえ感じる。

障子ヶ岳城（福岡県田川郡香春町・京都郡みやこ町）

○所在地 福岡県田川郡香春町鏡山・京都郡みやこ町

勝山松田

○別名 牙城

○高さ 標高四二七m（比高三五〇m）

○築城期 建武三年・延元元年（一三三六）

○築城者 足利駿河守統氏

○城主 足利統氏・門司国親・毛利氏・黒田氏他

○形態 連郭式山城

○遺構 郭・土塁・堀切

（参考文献『サイト…城郭放浪記』『益田市誌・上巻』等）

十三、炭坑節

炭坑節が大流行する中で、一部の出版物や歌詞カードに

誤記があつたことから、福岡県大牟田市の三井三池炭鉱（一九九七年三月三〇日閉山）で生まれたという誤解が広がった。また、伊田町と後藤寺町との間でどちらの炭坑節が元祖かという論争も過熱した。この論争は、伊田が元祖だということで一応は決着がついている。歌詞中の煙突は現在も田川石炭記念公園に保存されている三井田川炭鉱の二本煙突のことと言われている。

十四、JR日田英彦山線

以前は国鉄の添田線として始発は東小倉駅から出発していたが、現在は小倉駅からJRの日田英彦山線として、列車が走っている。呼野駅と採銅所駅の間は金辺トンネルがある。大正四年（一九一五）に完成、長さ一、四四四m。最近は国道三三二号線の金辺トンネルも二本開通している。東側には竜ヶ鼻、標高六八〇mがある。

十五、古宮八幡社

豊前田川 福岡県田川郡香春町大字採銅所二六一

縁起

香春岳で産出する銅を宇佐神宮の御神体（銅鏡）として奉

納していたことが縁となり、同神宮の御祭神であつた応神天皇、神功皇后の神霊を勧請かんじうしたことに始まるとされる。

祭神としては豊比売とよひめの(咩のみこと) 命も共に祀られていたが、豊比売命は近くに在る香春神社例祭の時には香春神社へ下向し、例祭が終わると再び古宮八幡宮に戻る。

歴史

- ・古宮八幡宮では長光家が宮柱を代々世襲している
- ・七〇九年官幣社の指定を受けたと伝えられている。
- ・七二〇年(養老四年)宇佐神宮に宝鏡を奉納するにあたり、宮座が開設される。

祭神

豊比咩命とよひめのみこと、神功皇后、應神天皇

由緒

三ノ岳の東麓の採銅所に鎮座するこの神社は香春神社の元宮とされる。祭神は豊比咩命一座との見方がある。香春神社古縁起によると採銅所の阿曾隈の社を信じ和銅二年新宮を勧請し奉り香春是也、本・新両社と号すと江戸時代に記されている。またより古くは岩本と云う所に祀られていたと伝わる。阿曾隈から現地には四〇〇年前に遷座したと云う。

十六、黒田氏

黒田官兵衛如水孝高よしたかは豊前中津城主である。嫡子は黒田長政。慶長五年(一六〇〇)九月には黒田長政、細川忠興(父は細川幽齋藤孝)等は東軍、徳川家康勢として関が原の合戦に出陣中であつた。慶長五年(一六〇〇)九月九日、黒田官兵衛(如水孝高)は中津城にあって大友宗麟義鎮よしのりの嫡子義統よしのりを討つため豊前中津城を出発した。官兵衛は国東の国見の赤根(現国東市国見町)から隊を二つに分け、三千名を木付城の細川勢(城代家老松井康之)の救援に出陣させた。官兵衛如水孝高の本隊、六千名は国東の富来城とみく(現国東市富来)及び安岐城(現国東市安岐町)を攻めたのち別府へ向つた。

十七、田川市石炭記念博物館

二本煙突

平成十九年(二〇〇七)一〇月二日、国の有形登録文化財(建造物)に指定。

高さ四五・四五m。旧三井田川鉱業所。

堅坑槽

明治四二年(一九〇九)に完成。高さ約二八・四m。

煙突、堅坑槽ともに田川市石炭・歴史博物館の敷地内に現

存されている。

参考事項、大分市佐賀の関の二本の煙突の内、古い方の一本は最近取り壊されている。

二〇一二年十一月十一日(日)、別府史談会主催見学会の当日、石炭博物館では当時の採炭風景を描いた山本作兵衛の原画展が開催されていて見学者で賑わっていた。

十八、山本作兵衛

一八九二年(明治二十五年)、福岡県嘉麻郡笠松村鶴三緒(現・飯塚市)生まれ。七歳から父について兄とともに炭鉱に入り、立岩尋常小学校を卒業後、一九〇六年(明治三九年)に山内炭坑(現・飯塚市)の炭鉱員となった。以後、採炭員や鍛冶工員として、筑豊各地で働きながら、日記や手帳に炭鉱の記録を残した。福岡県田川市にある炭鉱事務所の宿直警備員として働き始めた六〇代半ばに、「子や孫にヤマ(炭鉱)の生活や人情を残したい」と絵筆を取るようになり、自らの経験や伝聞を基に、明治末期から戦後にいたる炭鉱の様子を墨や水彩で描いた。余白に説明を書き加える手法で一〇〇〇点以上の作品を残した。主要作は画文集『炭鉱に生きる』(一九六七年)。「ヤマの絵師」として知られた。一九八四年(昭

和五十九年)、老衰のため死去、九十二歳没。

田川市は当初、市内に残る旧三井田川鉱業所伊田堅坑槽など炭鉱遺産について「九州・山口の近代化産業遺産群」の一環として世界遺産登録を目指していた。二〇〇九年一〇月に選考から漏れたが、関連資料として紹介した作兵衛作品の記録画は、現地調査した海外の専門家らから高く評価された。このため、作兵衛作品を保管する田川市と福岡県立大学は、世界の記憶(世界記憶遺産)登録を目指すこととし、田川市が所蔵する福岡県指定有形民俗文化財五八四点を含む絵画五八五点と関連資料(日記六点、雑記帳や原稿など三六点)と、山本家が所有し同大学が保管する絵画四点と関連資料(日記五九点、原稿など七点)を合わせた計六九七点について、市と大学共同で二〇一〇年三月、ユネスコ本部(パリ)に推薦書を送付した。二〇一一年五月二十五日に国内初の登録を受けることが決まった。

十九 余聞(一)、五木ひろし

五木ひろし(本名…松山数夫、まつやまかずお一九四八年三月十四日)は、日本の歌手。作曲家、俳優でもある。血液型はA型。二〇〇七年、紫綬褒章を受章した。京都府生まれ、福井県三

方郡美浜町出身。所属事務所はアップフロントプロモーション（旧・アップフロントエージェンシー）。

(二) 五木寛之

五木寛之（一九三二年九月三〇日ー）は、日本の小説家、エッセイスト、評論家、作詞家、作曲家。旧姓は松延^{まつのぶ}。以前は「五木ひろし」というペンネームであった。作詞家、山口洋子が新進歌手のため「五木ひろし」という名前を借用した。作家はやむなくペンネームを「五木寛之」に名前を改めている。五木寛之は「親鸞」、「蓮如」等、浄土真宗関係の小説でも名前が知られている。

(三) 青春の門

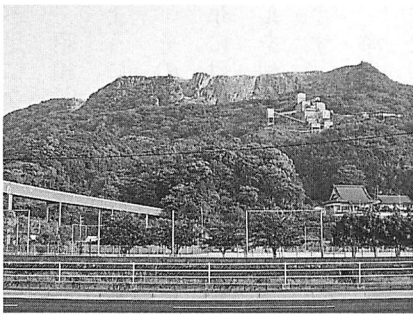
『青春の門』^{せいしゅん}は、五木寛之が一九六九年から『週刊現代』に断続的に連載している大河小説で、テレビドラマ化や映画化、漫画化もされた。一九七六年『筑豊編』で五木は吉川英治文学賞を受賞。早稲田大学の先輩である尾崎士郎の『人生劇場』に倣ったものである。映画には田中健、仲代達也、吉永小百合、大竹しのぶ等が出演している。

小説「青春の門」の書き出しは「香春岳は異様な山であ

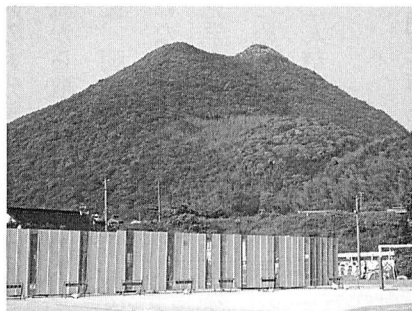
る。けつして高い山ではないが、そのあたえる印象が異様なのだ。標高にくらべて、実際よりはるかに巨大な感じをうけるのは、平野部からいきなり急角度でそびえたっているからだろう」と表現されている。

引用参考資料

インターネット、ウィキペディア等



香春岳一ノ岳



香春岳三ノ岳